The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『天狗の内裏』版本改作本について ： 付　実践女子大学山岸文庫蔵本翻刻
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	語文. 2006, 87, p. 37-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69081
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『天狗の内裏』版本改作本について

――付 実践女子大学山岸文庫蔵本翻刻――

箕浦尚美

室町物語『天狗の内裏』は、源義経の未来が、死後に大日如来となった父義朝によって語られる場面を含むため、他の判官物との関係がしばしば問題となる作品である。伝本間の関係は複雑であるが、古写本、刊本、十一段本（いずれも『室町時代物語大成』九所収）に大別される。島津久基氏が『近古小説新纂』（一九二八年、中興館）の解題で、「九品浄土の大日如来が修羅の苦を脱れん為に、平家討滅を懇嘱して、復讐道徳に凱歌を奏せしめたのは皮肉の極と言はねばなるまい。」と指摘しているように、本物語は、地獄巡り、仏教問答、因縁譚などを含む宗教法談物として分類できる内容でありながら、大日如来が平家討伐を命ずるという矛盾を含んでいる。この矛盾に対する意識は特に刊本において目立っているが、本物語に何種もの異本を生じさせた理由の一つに、この矛盾の存在が挙げられる。伝本間の異同は、義経伝説の異同だけが問題ではないのである。

本稿では、版本以降に改作された二種の伝本を考察する。その二種とは、実践女子大学山岸文庫蔵江戸後期写本（山岸本）と信多純一氏蔵文政五年（一八二二）六段写本（信多本）である。前者の翻刻本文は本稿末に掲載する。後者は、『詞林』四十号（二〇〇六年十月）に掲載する。また、古写本・刊本・十一段本の系統間の問題は、別に論じる予定（二〇〇六年十月中世文学会口頭発表）である。

『天狗の内裏』の版本には、以下の三種がある。伝本の整理を兼ね、各版本と同系統の写本・版本も記す。

①慶應義塾図書館蔵寛永正保（一六二四―四八年）頃丹緑本二冊。『室町時代物語大成』九所収。

・弘前市立図書館蔵丹緑本二冊。渋江抽斎旧蔵。

・天理図書館蔵写本一冊。①と同系の本文。天保六年に③万治二年刊本で校訂されている。『室町時代物語集』二の解題に記される「藤井乙男博士蔵本」がこれに当たる。

・大英図書館蔵桃山時代絵巻二巻。本文は①とほぼ同文であるが、脱文の状況から、①より先行するものとは言えない。絵は①にない場面もあり、①よりも細かく描き込んである。辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』（笠間書院、一九九九年）第二章Ⅱ「大英図書館蔵『天狗の内裏』」参照。絵は、平山郁夫・小林忠『秘蔵日本美術大観』四（講談社）所収。

②刈谷市立中央図書館蔵明暦四年（一六五八）丹緑本二冊。『室町時代物語集』二所収。

・西尾市立図書館岩瀬文庫蔵無刊記丹緑本一冊。

・東京大学総合図書館霞亭文庫蔵奈良絵本三冊。

③国会図書館蔵万治二年（一六五九）刊本。『近古小説新纂』所収。

刊本三種はほぼ同文であるが、助詞などの細かな語句に異同があるほか、以下に示す本文の異同によって明確に区別できる。則ち、②明暦四年本は、①寛永正保頃丹緑本の第七丁全てを欠落させて復刻した本であり、③万治二年本は、文意が通じなくなったその箇所に、「いかにも御ちそう申せとて、たゝみには」という文を補っているという点である（『室町時代物語集』二に指摘あり。）。この違いに着目して、山岸本の本文を確認すると、同書も、①の第七丁に当たる部分が欠落しており、その箇所を、③とほぼ同じ「いかにも馳走申せとて畳には（6オ）」という語句で繋いでいる。又、その他の異同に拠っても、①②ではなく③の系統と言える。又、①②③の伝本は全体としてはほぼ同文であることから、刊本とは大きく異なる山岸本をもとに刊本③が作られたというような考え方は成り立たないため、山岸本は③万治二年刊本の改作であると言える。同様の本文比較により、信多本は、①寛永正保頃刊本の改作と言える。

まず、山岸本を検討する。先行研究では、独自文のうち、義経が梶原景時に讒言される因縁が、前世の、頼朝坊・時政坊・景時坊の三人の順縁聖と義経坊をはじめとする十三人の逆縁聖の諍いによるものだと描く部分が注目され、その部分が宝永五年（一七〇八）刊『日本回国六十六部縁起』（大谷大学蔵）に含まれる因縁譚とほぼ同じであることが、小嶋博巳氏「六十六部縁起と頼朝坊廻国伝説―六十六部研究ノート・その二」（『生活文化研究所年報』二、一九八八年十一月）によって指摘されている。[1] 小嶋氏に拠れば、『六十六部縁起』には、室町中期頃写本や、鎌倉時代断簡も存するが、十三人の逆縁聖について記してあるのは、宝永五年刊本や文政五年（一八二二）『日本回国六十六部縁起』（元禄三年（一六九〇年）を初版とするが伝存しない）以降である。山岸本の本文とこれら版本は、語句がほぼ一致していることから、いずれかの版本から取り入れた可能性が高い。

本稿で山岸本を取り上げるのは、物語全体の構成についても目を向けるべきだと考えるためである。六十六部関連以外の改作点としては、牛若の地獄巡りに餓鬼道地獄や血の池地獄などが含まれていないこと、大日に面会する前の仏教問答が全く描かれないことなどが大きな違いと言える。これらは、単に、仏教的で冗長

と判断された部分の省略かとも見えるが、実はそうではない。六十六部因縁譚を増補するような作者がこれらを削ったのには別の理由がある。牛若が父義朝である大日如来に対面する場面における大日如来の発言を見てみよう。

汝が眼にハ佛と見へ候や、今かりに佛たいに身をへんぜしは其方を一度子に持し因縁により、且はやんことなき御身の前生其利益にてかくまでかりのすがたはうけたれ共、実には汝が二才の時悪徒の為ニ此身をほろぼし其時の残念の思ひにて身は修羅道にしつみつゝ、平家のもの共みやこに出て悪行なせしを折々に見るたび毎にしゆらの苦げんいよまして、此身のくるしみのかれがたし。千部万部の経よりも我くげんをすくわんと思ふなら、おくへ下りて、秀ひら佐藤をうつ手に頼み（19オ）

義朝が大日になれたのは、牛若を子に持った因縁であり、「かりのすがた」である大日は、修羅道で苦しんでいると言う。従って、本来の物語にあった問答が存在しないのは、単純な省略ではなく、修羅で苦しむ義朝には仏道修行を積んでいる牛若に対して問答を仕掛ける資格がないためなのである。万治二年刊本には、仮の姿だという記述はなく、

べちにくるしびはなけれども、こゝにひとつの思ひあり。みやこにへいけのものどもが、あくぎやうなせしおり〳〵は、みるにめんぼくなきまゝに、しゆらのくげんはのがれがたし。千ぶのきやうもいらず。かたきをうちてたび給へ。

（『室町時代物語大成』）

とあるのみで、苦悩の描写も山岸本ほど強くない。

改めて山岸本の地獄巡りの場面を見ると、「まづ修羅道へ御連申て御あん内申は」とあり、牛若は真っ先に修羅道地獄へ赴いており、そこで苦しむ武士の姿が描かれている。餓鬼道地獄や血の池地獄が記されていないのは、大日如来が修羅道の苦しみを語るのと同様、武士が直面する問題のみを大きく扱ったためと考えられるだろう。

物語の結末部分は、刊本と同じように、

おもては仁義礼智の五常を守り、内には後生即菩提為にとて念仏わすれず申させ玉ふ御事は、源氏のすへのはん盛と今の世々まて名を残し玉ふ、ありかたかりし次第なり（28オ）

とあり、五常として仇討ちを認め、内に念仏を唱えよと勧めている。武士である以上は怯えざるを得ない修羅の問題を強調して取り上げている点が本書の特徴と言える。これらの改変は、冒頭に記したように、大日如来が平家討伐を命ずるという仏教的矛盾を解決しようとしたためと考えられる。この矛盾は、古写本・刊本・十一段本の中では、刊本に最も強く表れている。本稿では詳述しないが、刊本には、仇討ちのための兵法を得るために内裏向かった牛若が、兵法と仏道の間で揺れる様が他系統の伝本よりも強く描かれ、刊本のみが、その矛盾を内の仏道修行と外の五常の両立で解決させているのである。

次に、信多本を検討する。本書は、『法華経』を中心に経文が

多く引用されており（『詞林』四十号所収拙稿参照）、本物語の宗教性に引き寄せられた改作である。山岸本で検討したのと同じ大日如来の台詞は以下のようにある。

汝、義朝が、かく仏と成、証りて在ると思ふかや、されば三界の独尊、久遠実成の釈迦牟尼世尊、十方の諸仏を化させ給ふ、我分身の大日、世を治んが其の為に、仮りに義朝と出現し、汝を世に立て妙なる御法の花の元、右の本土に立帰る、世に苦しみはなけれ共、夫、三千世界の者、皆悉く地獄に落ち、此の苦しみ逃れ難し、其の上、日本國土に於いて平家の悪逆が世を魔國となさん事、此苦患逃れ難し、千部万部の経もいらず、平家の悪逆を亡し、世を仏國となすならは、自他平等の功徳也、（31オ）[2]

信多本では、山岸本とは逆に、大日如来の仮の姿が義朝であったと記されている。世を救うために義朝として顕れたという書き方であるため、大日如来の尊厳が奪われることはない[3]。信多本は、宗教性を意識していたことが窺われるが、この大日如来の立場の明確化は、やはり、大日が仇討ちを命じるという矛盾を解決するためであったと考えられる。

これら二種の改作本に見られる仏と武の矛盾点の解決は、その元となった刊本において、仏と武の矛盾というテーマが他系統よりも強かったことが影響している可能性がある。古写本や十一段本には武と仏の対立意識を明確に読み取ることは難しい。物語が成立した初期には、恐らく、大日が仇討ちを命ずることにあまり違和感がなかったのではないだろうか。平家と戦うことになる義経の未来が、因縁に依って避けられないことと捉えるならば仏教的問題は起こらない。因縁が強調して記されているのは十一段本であるが、外の武道と内の仏道の両立によって解決策を求めたのが刊本であった。

以下に、山岸文庫蔵『天狗の内裏』を翻刻する。書誌は次の通りである。

江戸後期頃写。内題「天狗乃内裏」。左肩打付外題「天狗の内裏」。尾題なし。縹表紙。袋綴。二巻一冊。縦二三・五センチ、横一六・〇センチ。本文二八丁。遊び紙無し。片面八行、一行二五字程度。表紙及び第一丁表に「山岸文庫」の朱印。裏見返しに「名古屋藤園堂より／昭和十六年六月上浣岸酒舎」とある。

原文は、「ハ」「ミ」など一部の仮名に片仮名が用いられているが、小字の片仮名以外は平仮名で記した。本文の傍らに補入されている文字は「　」で示した。判読できなかった箇所は□で示した。私に、句読点、括弧を加えた。濁点は原文に依るものである。誤字は多くあるが煩雑になるため注記していない。

貴重な書籍の閲覧と翻刻の掲載を御許可下さった実践女子大学図書館に心より御礼申し上げます。

天狗乃内裏

去ほどに、はうぐわんどのゝ七ッの年よりくらまの寺にのほらせ給ひて御学文をめされけるが、もとより此君は毘沙門の御再誕の若君にてましませば、七歳の御時法華経一部八巻、八ッの御とし大般若経六百巻、倶舎三拾巻、ぶんすい経十四巻、其外さうしとりては、源氏、さごろも、ふらうゑひひちやうたばたまき、【1オ】すゞり、ふらうゑんじゆ、こきん、万やう、いせものがたり、凡百余条の草づくし、八十二ぢやうむしづくし、鬼が詠ける千嶋文、すきのみや、きりせがつほなんどゝて、さうしニとりても二千四百廿四巻をよみあかし給ふ。源、心におぼしけるは、「悟りとやらんいふ事を、少し見ばや」と思し召、十歳の時より山学に上らせ給ひて、十三と申に一千七百そくを明し給ふ。ある日の【1ウ】雨中のつれ〳〵に、南のつぼに立出て、花をながめておはせしが、「実にや花もさかりはいとすくなし。人間とてもかくのごとし。われは幼なき時父をうたれ、親のかたきをも打ずしてくれなんことをいと口をし。誠や我等か先祖の八幡太郎よしいゑは、十五の御年門出をなされ名を天下に揚給ふと承る。恐れ多きことながら、先祖をつゐで我も十五にならは門出をすべし。【2オ】されば、十三の年まで此山ニて徒に日を送りけるこそはむねんなれ。誠やらん、此山に天狗の内裏と申をば、おとにはきけど目には見ず。いかにもして此内裏を見ばや」なんとゝおぼしめし、雨のふる夜もふらぬ夜も、風のたつ日もたゝぬ夜も、かなたこなたと草木をわけ尋ねめぐらせ玉へとも、てんぐはもとより神通自在のものなれば、てんぐのだいりは見へざりけり。源、心におぼしめすは、「われいとけなかりし【2ウ】頃よりも毘舎門に深く頼をかけ申、此内裏に一たび逢んときせいせん」と、三十三度のこりをとり、わにぐちやうど打ならし、「南無大慈大悲の毘舎門天、我等とし月歩みをはこびし御利生ニ天狗にあわせてたび給へ」と、かんたんくだき祈らせ給へは、夜もふけゆくにしたがひて、自然とつかれまとろみ給へは、毘舎門天王、八旬ばかりの老僧と現し、まくら神にたゝせ給ひ、「いかにうし若、天狗の内裏にあいたくば【3オ】五更の天も明ヶゆかば、みさか口に出まち給へ。必ずおしへ申さん」とのたまへは、ゆめは其まゝさめにけり。源と、はっと心づき、いよ〳〵信をとりて、数の礼拝参らせて、夜もほの〳〵と明ヶ行ば、教へごとく三坂口に立出て、御利生は今やおそし待給ふ。忝も毘舎門は、廿斗の法師と現じて、身にはそけんの衣を着し、手にすいしやうの数珠を持、足には黒キ沓をはき、うし若君の前に立、「いかに牛若聞給へ。【3ウ】天狗の内裏か望みならば、是よりさんかいに登りつゝ、たつね給ふことならは、五色の築地を弓手に見なし、赤きついぢをめてになし、其外青き黒き黄色なる三ッのつゐ地を一同にふみならして行ならは、必すだいりに行付べし」と教へ玉ひて、かきけす様ニうせさせ給ふ。みなもとありがたく思召、けわしき坂を打登り、山伝へにたつね給へは、五色のつゐ地見へたれば、牛若うれしく思召、「我、此程の心をつくせしかども【4オ】たづねあうべきたよりなきか、かゝるきとくぞありがたし」と心もいさみ、いそがせて

ほどなくたいりのとう門に付せ給ひ、まづ外のつゐ地を御覧するに、石のつゐ地を八十余丈につき上て、石の大門打こへ給へは、［内には］鉄の築地ヲ六十余丈につきあげて、くろかねの門を立、夫より内ニは白かねの築地四十余丈につき上ヶ、銀の門には夕日を出して立給ふ。夫より内ニはこがねの築地三十余丈、金の門には朝日を出して立給ふ。しらすには【4ウ】こかねの砂をしきつめたり。御そうし、おめす内にいり、屋かたの様子を御覧つるに、七宝をのべたることくごとくにて、おとにきこへし極楽も是にはいかてまさるべし。御そうし、からきのきざはしを六七けん登らせ玉ひて内のていをつく〳〵と御らんすれば、納言さいせう以下北面のものども、位官けだかく引つくろい、ひつしと居なかれなみ居たり。源を見奉り、「いかにかた〳〵、此内裏へ人間の参るべき事はあらざりしに、こゝへ見へしはいかなる【5オ】人ぞ」とたつねられ、源ト答へて申さるゝは、「某をは當山にて七十五人のちごの中、今日某花の番ニさゝれけるが、花を尋て登りし所、はからすかゝる内裏に参りたり。東方ならは薬師の浄土、南方ならは観音無垢世界にてもあるやらんと存候也。とても是まて参りし上ハ何卒、帝に御目見へ申たし。奏聞申てたび玉へ」と仰られけれは、此由人々承り、「たゞ人とは見へ玉はず、【5ウ】いかさま奏聞申べし」とて、紫宸殿に参リ大天狗にそうもん申ければ、大天狗は元よりも神通の事なれば、「よし〳〵くるしうなき人ぞ、源氏のわすれかたみに牛若君と申なり。いかにも馳走申せ」とて、畳にはへりがねをわたし、段〳〵村雲にしかせ、柱は金銀のどん巾にて巻たて、天井をは、からにしきにてはりまわし、上坐には畳七じゃうかさねて白銀のぶんとうたてさせ、大天狗はあいの障子さっと【6オ】開き、「是は〳〵御そうし、珍敷御入なり」とむりに上坐の七畳臺へ請し奉り、大天狗は畳三ぜう下つて三度拝して両手をつゐて申上けるは、「存もよらす源御そうしの御入、定て子細候はん」と申上けれは、御そうし申さるゝに、「思もよらす初ての對面、某義は別の子細候はねとも、定て知らるゝ通、八幡太郎義家の裔孫なりしが十歳の時より此山に登り山學せしかども【6ウ】此山中に天狗の内裏と申がありと兼て聞及しか、今日はからすも花を手折に出しかど、道にまよひて此内裏へ来りけれ。扨、をと聞しよりも猶けつこうなるかまへなり。思はず格別の尊敬ニあづかり痛入存候」と申されけれは、「是は〳〵思ひもよらぬ御言葉に預り、冥加至極、何かな御なくみ」とて、小天狗壱人召出し、「其方義、愛子山の太郎坊、比良［の］山の次郎坊、高野山の三郎坊、奈知山の四郎坊、かんのくらの豊前坊、【7オ】此五人の方へ時の間にいたり、今日珍らしき御きやくをもふけてありつる程に、即座に参て御なぐさめ申さるゝべし」申付けれは、小天狗は、「承る」と答へもあへず座敷を立てせつなの間に飛かへり、「只今五ヶ所の天狗がた参内」と申上けれは、五人の［大］天狗は小天狗あまた引具し、おもての縁にぞ参られけり。内裏見るより「何れも打そろひ、早速の参内満足〳〵、今日、存もよらす源の御若君是へ尊出被来下ける。何がな御なくさみに【7ウ】存すれ共、身ども一人にては何事も御なくさみにならず。是によ

って其許たちを相まねき候也。」申さるれは皆一同に御そうしを拝し奉り、五人の大天狗のみつぎものは、小かね三千両るりの盆にたちばながたにつませて若君様へ献上と、扨、御さかづき各頂戴、御馳走は山海の珍味何事も時の間［調へ］至りけり。いつきかしづき奉る。又、大天狗、小天狗を召出し申付ル＝は、「大唐の法光坊、天ぢくの日りん坊、これら弐人【8オ】天狗たちにめつらしき申たり、御出あれと申せ」と仰つけられ、「承る」と申て、しらすにゆらりと下りけるが、以前のことく、へんしのあいだにはしりかへり、「只今弐人の天狗たち、彦山にて、すご六打てをはせしが、只今是へ」と申もあへず、弐人の天狗は、供天狗数百人召連れ、表ての縁に参られける。大天狗は見るより、「いかに両人、源様の御入ぞ。何れも是へ通つて【8ウ】御げんざんに御入候へ」と、二人は「承る」と申て、若君の御まへに罷出悦事かきりなし。めい〳〵御酒ゑんの御もてなし、御盃も大かたなり。大天狗申さるゝは、「いかに興も候はず、御身たち、先祖よりつたわりたる神通を一ッ御慰に」と、このまるれは、弐人の天狗は、「安き事にて候」と、忽、両人、中座をさして走り出、先、大唐の法光坊、「身ともが家につたはる術を御覧に入れん」と、あいのせうじをさらりと明れば、【9オ】是は［と］をどろく大唐の径山寺、眼のまへにあらわれたり。扨又、すさまじき大きなるつり鐘をとふしんを以、是をつり、かうらい国のしゆもくにて是をついて御覧にぞいれける。扨又、南海道ニ［一同ニ］火をともし、同さましかりけるありさまを、御なくさみニもいたしける。其次ニ天竺ニ国の日りん坊もあいのせうじをさつとあけ、「御らんあれ」とぞ申さるゝ。源、御覧すれば、霞につなをわたし雲に橋をかけ遠山に舟を浮べ【9ウ】自由自在ニ登りつ下りつ、いとふしぎかきりなし。次ニ大天狗、五人の天狗に好まれける。「御身たちの兵法一ッつかふて見せ給へ」とのたまへは、「承る」と申て、しらすにゆらりと飛で下り、秘術をつくして見せ申。源と、もとより望む所なれは、廣縁にゆるぎ出させたまひて間じかくよりて御覧じけるに、心も言葉もおよばれす。悦給ふそ限りなし。五人兵法も事おわれは、大天狗申されしは、「扨、弐人の神通も五人の兵法も一通り【10オ】御目にかけ候へは、次われらも何がな御なくさみに存すれ共、珍らしき事も候はね共五天竺を御目にかけ候はんと、こなたへ入せ候へ」とて、玉の座敷へ請じ申。先東の障子をさらりと開けは、とうぜう国七百余州を一目あらはし見せられけれは、源、早筆ニ唐紙に［百帖はかりニ］写し給ひける。次ニ南の障子を開けは、南天竺ニ七百六十余州の民のかまどかまど迄不残見へけれは、是唐紙百帖ニうつさせ給ふ。西も同しく開けは、西天竺七百余州の山の姿木のこだち【10ウ】まのあたりにあきらかに見へにけり。夢幻しとも覚へず書写し給ふ也。北天竺ニの流レ中天竺ニのありさま都て五天竺ニのやうだいを五百余帖ニ写［さ］せ給ひ、末代迄の宝にせんと悦給ふぞ限なし。かゝる時御后の方より大天狗のもとへ御使ありけるは、「ちと申上度ことのあり、御入らせ玉へがし」と申越けれは、大天狗は、「何事やらん」と簾中へ入りたまへは、御后、大天狗のたもとにすがりつゝ、「誠や

らん。しやばよりも源様とやらん申若君の御出ありしと承る。【11オ】みつからも娑婆のものにて候へは、恋しく思ひ候ぞ。自、娑婆より参りて御身と契をなせし事も、昨ふけふとは思へ共、七千年にもなるぞかし。其年月の御情に、へんしのいとまを玉はりて其若君様ニ御めにかゝりたく候へは、しばし内にめもじをゆるさせ給へ」とのたまへは、大天狗もいかゝあるべきとも［は］（「も」の右傍）思へとも、さすがに岩木ならねば、「実にも其方の申通り、唐日本はいふもさら、五天竺ニもならふかたなき若君なれは、御目にかゝり度は【11ウ】ことはり、とく〳〵出て御たい面可申」とありけれは、御后はなのめならざる悦にて、十二一重を引ちがへ、緋の袴をふみしたき、あいぜん王のあいけうの守りを首にかけ、口に仏語を唱へつゝ、われにおとらぬ女房達、あまた引くし立出たる其姿、たまびんづらの花のかんばせいろやかにして、実にや秋の月の遠山にちすいを照らすことく也。源、御覧ありて、「あわや是こそは大天狗の御臺所」と思召、「げにや女はくわしよくに余りしものそとよ、是へ〳〵」と御せうしあり。后、坐敷になおりつゝ【12オ】若君をつく〳〵とおがみ申て、やゝありて后申けるは、「かくと申さんもはづかわし。去ながら自が先祖をかたり可申。かく申みつからもしやばのものにて候ぞ。國を申せば甲斐の国、所を申せば二ッ橋、古今長者と申ておわせしが、そのこきん長者がひとり娘きぬひき姫とは自らなり。我十七歳の春の頃、花薗の山立出て、くわんげんして遊しに、みつから琴の役、其日のつまおといつにすぐれていみしかりしを、自が心に思ひけるは、恐らく日の本に並ふかたも有まじな、【12ウ】けよふの妻音たれかまさらじと高慢せり。そのおり神風さつと吹来り、そのまゝ天狗にさそはれ、かゝるだゐりへ参りつゝ、きのふけふとは思ひしかども年月をかぞふれは七千余年になるぞかし。このとし月をおくりても、ことにたのしみも候はねども、一ッの悦には死してめいどに、をわします、二人のおやに月に一たび二たひ三度ヒおかみ申、是ぞ一ッのたのしみなり。我君も、二歳の年に御父におくれさせ給ひぬれば、さこそは恋しく思召らん。我つまの【13オ】大天狗は一百三十六地獄、又九品浄土にも日々に飛行したまふなり。御身の親御のよしとも様も九品浄土に大日如来とそなわらせたまひておわしまし候ぞや。かまひて自が申せしとは仰候わず、大天狗をわりなくたのませ給ひなば、つゐにはあわせ申さるべし」とうけ悦ばせ申、うちとけ語り給ひければ、源、なのめにおぼしめし、「さわありながらふしぎさよ」とぞ仰ける。かくうちかたらひ「目出度御酒を参らせよと承る」と申て、若き女房達【13ウ】出しやくに立、とり〴〵にみきをぞ勧めける。わが身もくわゐにまいりつゝ、「何のけふも候はねども此酒の由来を語り可申。抑、此酒と申は、忝くも妙法蓮華経の一部八巻にそなはる文字は六万九千三百八十余字の文を以てゐかうして良薬にて造りし薬酒にておはします。一ッまいれはしゆ人あいけふ、二ッまいれば人にうやまわれ、三ッのめば思ふこと叶ふ、四ッのめばしんたいさだまる、五ッハ五たい五りんとあらわれ、六ッハ六道のさたをへうす、【14オ】七ッのめば仏名に叶ひ申す、八ッの

めば八苦のくるしみをのがる、九ッのめば国の主となるとかや、殊にいわゐの御酒なれば九こんまいれ」とすゝめられ、いわゐのこんも通りければ若君の御盃を后へ玉はり、いく年月の目出たせよと又御そうしへさし参らせ、いとま申てさらばとて、れん中深く入にけり。かくて御そうし、やゝ大天狗にあひ仰けるは、「さてもく此度の御もてなし、申なかくおろかなり。言葉にも及はれず、ふでにもいかでかつくしかたし。御恩のほど山ならば【14ウ】須弥山か海ならばさうかいとても云がたし。いつのよにわ、わするべし。とてもの御事に爰に一ッの望みあり。誠やらん、娑婆にて承り候ニは、御身は一百三拾六［地］獄、まつた十方の浄土にも飛行したまふと聞候なり。我等父の義朝には二才の時におくれ候へば、いかにもして一目おかみ申度候。ひたすらにたのみ申」と仰ければ、大天狗申さるには、「左ニて候へ共、是におゐては叶ふまじ、さりながら此たびの御出かへすくも忝く候。われとわれとのたいだんをは御存【15オ】なされて候歟。御語り候へ、てうもん申さん。」御さうしはきこしめし、「われらと申は七ッ［の］としよりくらまの寺にのぼり、経論、しやうげう、和漢のさい、しい歌、くわんげんに心を盡し、山学なとも一千七百そくをまなびしが、その中にも、天もてつへき地もてつへき、四方てつへきなる時は、是がわれとの對談ぞ、万法一如と聞く時は、扨、三界にかきもなし、六道にほとりなし、方に二方なし、ほとけに二佛はましまさず、是がわれとのたいだんなり」とのたまへば、【15ウ】其時天狗、「あらありかたや、さらば御とも申べし。こなたへ入らせたまへ」とて、れん中ふかく請じられけり。御さうしをば玉の臺に置申、娑婆より召れし御こそでひたゝれをばぬかせ申て、せきあへず。さてしも有べきことな［ら］ねば法被にきせかへ申て、まづ修羅道へ御連申て御あん内申は、源たちよりつくくと御覧すれば、まつしやばにて父をうたれしそのかたきをうたずして死たるものと見へつるが、われと我身と［きつつ］とつゐつ一かたならぬ苦げんなり。【16オ】こゝかしこと見玉へば、しやはにありしにたかはず、かね、たいこ、かいなどをふき立入みだれ切むすぶ。まけるかたは、にけゆくありさま、かちたるかたは、かちときをつくり、ときのこへ矢さけびの音、天地もひゝくばかりなり。扨、「苦げんをば何としてのかるべきそ」との玉へば、「娑婆の軍の其時にうつかたきをばかねとなし、つるきをばしゆもくと観念し、過去の因果はかくのごとし、未来はともに成仏と思はゝ、則げだつすべし」と申されける。それをも打すぎ、地ごくのかずく【16ウ】一くに御あんなゐ申に、いづれもおろかなき苦げんのありさま、ごくそつとものかしやくのせめにひまもなく、ざい人［の］おめきさけぶ声のんどにせまり、ものすさまじき有さまは、おそろしきとも中ゝに、しやば［に］たとへん方ぞなし。身の毛もよたつばかりなり。　上の巻

さて八かん八ねつの地獄も悉くわたらせ給へば、それよりして十方浄土へうつら玉ひければ、ぢごくのうきに引かへて、見佛聞法心よく、【17オ】木々の梢まで微風につれて法をとく。みめうきれいのありさまは、心もことばも盡されず。さて諸仏如来の御そ

うがう、ありかたきとも中々に、たとへんかたもなかりけり。中ニもすぐれし西方［の］弥陀のはいせしかば、九品の蓮すは池にみち、たわむれ玉ふぼさつたち、いく千万とも数しれず。其中に光明あざやかなるがたち玉ふ。「是はいつれ」尋させ玉へは大天狗教へ申て、「是ぞ御さうしの御ちゝ君【17ウ】義朝公、今は此土に安住し大日如来の御跡をつぎ、すぐさま大日如来にてましますぞ」と申せは、若君飛たつほどに御悦かきりなし。叶ふ事なら御言葉一たびかわし申たしと、親子のちぎり浅からず。御前に立向ひ礼はいましまし玉ひければ、如来もゑみをふくませ給ひ、「善哉〳〵うし若丸。汝、此所へ来る事は叶ふまじきを不思議に是へ来たりしぞ悦ひ也。くるしくはなし、ちかふ〳〵」との玉へば、恐れながらも玉のいらか【18オ】ふむさへも、あらもったいなや思へとも、うれしなみたにむせびつゝ、ゆめうつゝとも覚へなく、御前ちかく御参あれば、佛は御手をさしのべて、「善なるかな牛若丸、善ナル哉、しや那王子、汝、過去の因縁浅ふして、はやくも父におくれしが、母の存生たるにより、それまでせい人いたせしは、かけなからもよろこばし、さりながらそれまでそたち候うち、さぞやうき目をいたしつらん。しかしながら草葉の影にても汝を守り候ぞ、汝は御夢にもしらま【18ウ】ゆみ、それに引かへほとなく源氏の世とはなすへきぞ。」或はくどき、或はなげきのたまへは、御ぞうしは父の存念きこしめし、流るゝ涙は五躰をしぼり、かゝる涙のひまよりも、御ぞうしのたまふやふは、「かよふに御佛にならせ給ひてましませば世にくるしみは候わぬや」と御尋ありけれ。佛、両眼よりさら〳〵と涙をなかさせのたまふやふ、「汝が眼にハ佛と見へ候や、今かりに佛たいに身をへんぜしは、其方を一度子に持し因縁により、且はやんことなき【19オ】御身の前生其利益にてかくまでかりのすがたはうけたれ共、実には汝が二才の時、悪徒の為ニ此身をほろぼし、其時の残念の思ひにて、身は修羅道にしつみつゝ、平家のもの共みやこに出て、悪行なせしを折々に見るたび毎にしゆらの苦げんいよまして、此身のくるしみのかれがたし。千部万部の経よりも、我くげんをすくわんと思ふなら、おくへ下りて、秀ひら佐藤をうつ手に頼み、あまねく【19ウ】ひくわんを引率し、みやこにうつてのぼる時は、平家を滅んこと掌にあり。其時こそは我かげ身にそひて守るべし。しかし、我先祖の八幡太郎義家は、十五の御年門出［で］めされ、東夷をたいらけ名を天下にあげ玉ふ。しかるに汝、当年十三歳なり。来年十四才ニならは、父が十三年のけふやうに、都に登りて五条の橋ニ待ちぶせせば、夜行の悪徒［党］（「徒」の右傍）はいくわいせん。其時千人切を【20オ】なさんと心得［よ］。にぐるもの［を］（「に」を訂正）はたすけておき、刃向ふものをば切てのけよ。しかし九百九拾［九］人まで切て捨たる其跡に、かゝり来るは西塔の武蔵坊弁慶と申兵、是とても打て捨るは安けれど、御身が為にのち〳〵はやうだつものにてあるべきぞ。是一人は助けて降参いたさば、ひくわんニせよ。夫より吉次を頼み東ニ下るものならは、十善寺ばゞさきの小松原にて、みのゝ国の住人せき原の与市と云ものが、三十六きにきばうたせ

【20ウ】都へ登るとて汝にあふてくわんたいすべし。あいかまへてかりそめごとゝ思ふとも、源氏の門出なる間、のかさず切ておとせ。弓手を汝が打ならは、めてをばわれらか打べきぞ。こゝに一ッの大事あり。汝、あつたに下る時、母の［常］槃がおつかけとめん、それが為に跡をしたひてくだるとて、美濃と近江の堺なる山中といふ所にて熊坂といふ夜盗のやつばらに［むざんや母は］がいせられんぞ、あさましき次第なれども、前世の宿因なれば力およばず。さりながらやがて母の【21オ】かたきはうたすべし。汝ハみのゝ国樽井宿ちうかう坊といふものゝ所にやとるべし。吉次がたからをとらんとて、よたうどもが押入るべし。あいかまへて母のかたきである間、あますなもらすな切て捨よ。本意をとげて血まつりにせよ。夫より下るものならは、するがの国ばんば宿ふじや太夫と云ものが所にとまるべし。むざんや、汝は、にはかにやまひにおかされ、あともまくらもわきまへぬを、吉次はすてゝ下るべし。ふしや太夫は【21ウ】やさしきものなれど、女房はじやけんなるものにて、汝をば吹きあげばま六本松のもとにすてさすべし。汝はそこにてむなしくなるべきなれど、さりながら幸ひなるかな、三河国浄瑠璃姫其場に来合いたはりて汝をかんびやうせんとほかにやどゝりてかい抱せしかば、やかて本復なるべきぞ。夫より後は何の子細なく奥州へ下りつゝ、秀ひら佐藤に出逢ふなら、是等を味方ニ頼むべし。其後四国讃岐の国法眼か家に【22オ】つたわるいしだまるたじんづうといふまきものあり。彼ほうげんがひとり娘みなづる姫にちぎりをこめ、かのまきものをぬすみとらせ夫をもちかへり候へ。又日の本より丑寅の方ニ当りて鬼満国といふ嶋に渡り候へ。此しまは鬼の住嶋にて其国の大将八面大王と申せしが、彼大王四十二巻のとらの巻物を所持す。汝、かれが家のむことなり、あさひ天女にちぎりをむすび、かの巻物をひき出ものに【22ウ】とりて立かへれ。此両巻手に入ときは、凡、此日の本と恐ることのなし。汝其時十八歳と成、ひでひら五十万騎を引率し都をさしてのほるべし。其時、いづ国北条ひるが小じまにありつる汝が兄の兵衛の佐も、人じゆをもよほし心を合せ、同しく都へ一同のぼるならは、平家は大半ほろぶへし。西海におひ下し、八嶋たんの裏にて互に軍をはげむへし。その時平家の大将能登守のりつね汝にあふて矢【23オ】つぼをかふべし、あひかまへておくせずうけよ。是をもわれらがはずゝべし。去ながら奥州の住人佐藤庄司が弐人の子の中兄の次のぶは、汝が身がはりたち、此矢に当りて死すべし。是も前世の宿業にてそれまでの命なり。其後平家はほろびつゝ、汝じ、廿一と申には必す天下を治むべし。しからば兵衛の佐をば関東に御所をかまへ、かまくら殿とあかむべし。汝は都にのぼりて堀川御所［と］あをがれなん。【23ウ】其時は何の子細も候はねども、時経へて梶原平蔵景時と申もの、汝か事を兄の兵衛の佐に讒言せしかば、夫より兄弟不和となるべし。その子細委しく語て聞すへし。よく聞ョ。さきの世に頼朝房時正房景時房とて三人聖あり。又逆縁聖十三人あり。一番に義経房は源氏の大将太夫判官源九郎義経と現し給ふ。二番に兼興坊いまゝしをの十郎権の守兼興是也。【24オ】三番に

武蔵坊今西塔の武蔵坊弁慶是也。四番に重宅坊今鈴木の三郎重宅これなり。五番に吉盛坊今いせの三郎吉盛これなり。六番に清重坊今するがの次郎清重是なり。七番にじやうろく坊今いまひたち坊かいぞん是也。八番に廣経坊今源八兵衛廣経是なり。九番に兼高坊今わしの尾の十郎兼高是也。十番に法介坊いまかた岡八郎法介是なり。【24ウ】十一番に次信坊是は佐藤三郎兵衛次信是なり。十二番に忠信坊是は佐藤四郎兵衛尉忠信是なり。十三番に重清坊今かめゐの六郎重清是なり。この十三人はぎやくゑんのひぢりなり。然るに右の三人のひちりのうち、頼朝房とは日本の太守開基大将軍右兵衛佐源頼朝公と現じ給ひ、時正坊とは北条の四郎遠江守時正公、景時坊とは梶原平蔵景時のことなり。然るに中国安藝の国【25オ】いつくしまにおゐて、義経坊と景時坊と大口論をなす。これによって本願主頼朝坊の下知にそむき、大願の本意を失ひ東三十三ヶ国に御経をおさめづ。そのいこんによって、景時坊にくしにくしと思ふねんによってざんげんを以て汝をひしぐ。汝とし三十二の四月廿九日には奥州高立にてむなしく成べし。かくごとく因果は車のにはにめくるかごとし。かまへて人をも身をもうらむることなかれ。」【25ウ】みなぜんせのありさまこま〴〵と示し給へは、御そうし具ヵにきこしめし申上らるしさいは、「我等七ッのとしよりもくらまの寺へ上り学問の極め日々御きやう讀誦して、御菩提のためとゐこう申す。左様ニ思召さるゝならは、出家の心を打捨てはやくも奥州に下りつゝ、ひくわんけらいを引率し、敵を打てまいらすべし。まもりの神となり給へや、弓矢の冥加あらせ給へ」と、こともなげにぞのたまひける。【26オ】義朝なのめに思召、「さらば汝が後生参るべき浄土を開て見すべき」とて、さらりとあらはるぜうどこそ、金銀るりはり［等の］七宝を以て荘厳し、やうらくさいなんかざりつゝ、廿五菩薩はおんがくのてうしをそろへてまい給ふ。あわれ二度娑婆界へはかゑらずに、直に此身をとまらばやなんどゝ思召こそありかたき。其時大日仰けるは、「汝いまだ娑婆の縁つきず、かへり玉へや牛若丸、かまへて後生【26ウ】菩提の心をはなれず、片時の間も念佛をかならずおこたり給ふまじ。いとまごひの餞別に三千世界見すべし」とて、こなたへあない給ひて、あゐをさらりおし開けば、凡三千大千世界一同にあわれけるこそふしぎなり。「牛若よく見よ、いつ何時にたか身の上にいかよふのことあるも、かゝみにうつすことく也。六通自在を以あらはせしこそありがたき。御なこりおしくは候へど、いとま申ておさらば」とて、御門をさして立【27オ】給へは、如来もしばしか程見送らせ給ひ、互のなみだせきあへず。大天狗と打連れて、もとの内裏へ帰らせ給ふ。紫宸殿の簾中に入り、御后に向ひ申させけるは、「御身の仰せにて大天狗の御導により思ひよらず父上に對面いたし、生々せゝの悦也。」重々れい申て、大天狗にもいとま申て立出る。大天狗もみたいもともに御なこりをおしませて、「若君いましはし」と押とゞめ、「又こそ参り候はめ、今よりも【27ウ】師弟のけいやくを申すなり」とて出玉へば、こがねの門に出玉へば、ともに見をくり、「おさらば」と、いふかと思へば、東光坊の中の座敷へ帰らせ給

ふ。かやうの次第を見きくから、おもては仁義礼智の五常を守り、内には後生即菩提為にとて念仏わすれず申させ玉ふ御事は、源氏のすへのはん盛と、今の世々まて名を残し玉ふ、ありかたかりし次第なり。【28オ】

注

(1) 小嶋氏論文以前には、徳田和夫氏「「天狗の内裏」攷―義経伝説と諸本と―」(徳田和夫『お伽草子研究』一九八八年、三弥井書店、初出一九七五年)、信多純一氏「山中常盤について」(『絵巻山中常盤』角川書店、一九八二年)が山岸本の因縁譚と六十六部の関係を検討している。

(2) 引用に当たって、句読点を施し、平仮名には適宜漢字を当て、誤字は訂正した。振り仮名は省略した。

(3) 義朝を大日如来の仮の姿とする記述は、十一段本にも、「我も本は、くう〳〵しやく〳〵として、不滅不去不来、三界一心と守ル、大日にて有ける、其頃、衆生乱れて有けれは、さいとせんか其ために、源氏の大将、為義か子、義朝と生をなし、汝か父と成たるそ(『室町時代物語大成』)」と見られる。但し、六段本と直接的な関係はない。

―国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員―